

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港塩口24
電話2-9772

生徒指導より

生徒指導担当？



私が学校に電話するときに「生徒指導担当の先生をお願いします」と言っていることがあります。よく考えるとおかしな表現だったと反省しています。正しくは「生徒指導主任・主事の先生をお願いします」です。先生方は必然的に日々の教育活動において生徒指導を実践されています。すなわち、全職員が生徒指導を担当しているのであり、生徒指導の実践者です。二期も学校訪問の機会があります。「教育活動の基盤としての生徒指導」という視点を先生方と共有し、教育活動の充実に向けて協働していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」の事を言います。また、生徒指導が日々の教育活動において機能するためには、特に児童生徒の「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定」を援助することが重要とされています。この三つのキーワードが具現化されるためには、主体的・対話的な授業展開や自主的・実践的な活動の設定が必要であるように思います。児童生徒が主体者になることで、教職員は援助者になりえるのではないのでしょうか。

内省的に振り返る

日々の教育活動で生徒指導の課題に直面したとき、また、生徒指導を実践する上で悩みや迷いが生じたときに、同僚

の先生に相談することも多いのではないかと思います。

私もこれまでたくさん同僚にアドバイスをもらい、その経験に学ばせていただきました。しかし、「しつかりと自分自身を振り返ったことがあるか？」と問われると、あまり自信がありません。

例えば、授業や行事などはねらいや目標があつて、それらに照らして児童生徒は自分自身を振り返ります。活動のねらいや目標といった明確なものがあるからこそ振り返りができます。

では、生徒指導の実践を振り返るための「明確なもの」はあるのでしょうか。「すばり、これです！」という事は難しいのですが、「これはどうでしょう？」と紹介できるものに「生徒指導提要（平成二十二年 文部科学省）」があります。かなり分厚い冊子です。通読するのは大変だと思ひますが、大切な内容が項目ごとに詳しく記載されていますので、目次をご覧になり、ご自分が課題と感じておられる項目の頁を丁寧に読んでみて

はいかがでしょうか。

例えば、前述のキーワードについて振り返ります。



- ① 児童生徒に自己存在感を与えているか
- ② 共感的な人間関係を育成しているか
- ③ 児童生徒に自己決定の場を与えているか

この問いに「私は」と主語を付けてみましょう。そして、「いつ」「どの場面」「どんな方法で」と具体的にしてみよう。さらに、生徒指導の実践者として、そのときに「どのような援助をしたか」ということを振り返ってみてはいかがでしょうか。

児童生徒の姿から生徒指導を評価することは一般的ですが、教職員（自分自身）の姿から生徒指導を評価することも大切なことだと思います。「内省」という言葉があります。自分自身で自分の考えや行動などを深くかえりみることも時には必要です。経験

特別支援教育より

次に目指したいもの



(文責 濱田)

則は大切ですが、一方で理論や概念に照らして自分の実践がどうであるかを考えてみることも大切だと思います。そのとき、生徒指導提要は先生方の経験を補強してくれるものと思います。

て約一〇年。「まずは気づきを大切に。そして気づきがあったらその背景に目を向けて」このことについては、今、学校の中に当たり前のことのように定着していると実感しているところです。

一学期の学校訪問では、大変お世話になりました。今年度も特別支援教育の視点から多くの相談をいただきました。先生方から「少し気になります」と気づきのあつた子供の総数は、隠岐管内児童生徒数の約一割。多いな…と受け止められる数字かもしれません。この数字は「怠けてせんが、この数字は「頑張れている」「努力不足だ」「頑張ればできる」こういった見方はなく、先生方が「子供が困っている」「その困り感の背景は何？」と特別支援教育の視点を持って子供の姿を見てくださいというこの裏返しでもあると思います。特別支援教育がスタートし

「さて、では次は？」というところが、今問われる隠岐の課題ではないかと思ひます。次は子供の姿を予想することと支援の検討・提供（言い換えれば合理的配慮の提供）ということになるでしょう。授業場面で言えば「〇〇に困り感のあるAさん、明日の授業のあの場面でこんな姿が予想されるな。よし、あの場面では、こういう教材をもってこよう」「Bさん、あの場面ではきつと友達と一緒にがんばれるな。少し離れて見守る支援をしよう」など。これには先生方一人一人の想像力、構想力が必要です。

特別支援教育の視点から「できた」「わかった」を支える授業づくり、そして一人の学びの保障に向けての取組が行われることを願ひます。

(文責 加多)